

「女性診療」を軽やかに深く

片岡仁美

岡山大学病院 総合内科・総合診療科/ダイバーシティ推進センター



わが国に初めての「女性外来」が設立されてから、約20年が経過しました(p.281)。しかし、そのニーズはますます増えることはあっても、完全にニーズに応えられているとは言えない状況ではないでしょうか。一

方で、産婦人科・総合診療科の連携の動きや、サブスペシャルティ領域としていっそうの認知が進んでいることなど、「女性医療」の注目度は高まっています。しかしながら、「何となく苦手」と感じている方もおられるかもしれません。私も、女性診療に積極的に関わる前はそうだったようにも思います。

私が「性差医療」に導かれたきっかけは、1冊の本との出会いでした。糖尿病専門医として臨床・研究に従事していた医師6年目に、新設された総合診療内科に移ることになり、同科の初代教授の小出典男先生が、天野恵子先生(p.280・314)編著の『行き場に悩むあなたの女性外来』(亜紀書房、2006。p.375)を下さったのです。性差医療の歴史から臨床事例集まで非常に充実した内容でしたが、なかでも「微小血管狭心症」(p.280・329)の概念は印象的でした。私が実際に微小血管狭心症の患者さんに出会うのはその数年後でしたが、本で読んだ記憶と目の前の患者さんの訴えが一致する忘れがたい経験であり、のちにNHKの「総合診療医 ドクターG」でも症例提

示させていただきました。

女性特有の疾患や男女で臨床経過が違う疾患があること(p.280)、そして女性の一生は「女性ホルモン」の変動に大きく影響を受けていること(p.290・288)。医療における性差を実

感するにつれ、自身が年齢を重ねていくにつれ、その奥深さ・豊かさに惹かれ、また患者さんの訴えもよりよく理解できるようになりました。その頃(2012年)、岡山大学病院にも「女性外来」を立ち上げましたが、性差医療に取り組むなかで「東洋医学」(p.289)を学ぶ機会も得て、通常の総合診療外来でもより深い診察ができるようになったと実感しています。

私はまだ性差医療の世界に足を踏み入れたばかりと言えますが、本特集では日本の性差医療発展の草分けである天野先生を筆頭に、その礎を築いてこられたエキスパートに、女性のライフサイクルを縦軸として“よくあるプロブレム”にQ & Aで答えていただきました。尊敬してやまない多くの先生方の、診療の実践のなかから紡がれる文章は示唆に富み、そして女性への温かい眼差しに溢れていると感じます。日常診療で「どうしよう?」と思った時、すぐに手に取れるような“軽やかさ”がありながら、「女性診療」の“深み”も感じられる特集になればと思います。 G